令和７年（2025年）７月31日

１学期終業式

校　長

全校のみなさん、こんにちは。

４月以降、一学期が怒涛のように過ぎ去ったと感じているのは私だけではないと思います。皆さんはいかがでしょうか。

一学期の最後に、今週、１，２年生は、ワークショップなどの探究活動を通じて、学びの楽しさを体験し、自分自身の将来につながる何かを得ることができたのではないでしょうか。また、３年生は、自分の希望する進路に向かって気持ちを切り替える時期です。焦りや不安でいっぱいの人もいるかと思いますが、皆さんには、部活動、とんぼ祭などをやりきったパワーがあります。一人一人、価値観や考え方は異なります。周囲に惑わされるのではなく、自分で考え判断していただきたいと思います。学校も精いっぱいバックアップしますので、先生方に相談をしてください。自分に自信を持って、自分を信じて、今できることに全力を注いでほしいと思います。そして、迷うこと、不安なこと、戸惑いがある人は、ぜひ「黎明」を手に取ってください。「黎明」は単なる合格体験記ではありません。先輩たちがどんな思いで高校生活を送ったか、受験に臨んだか、まさに先輩たちの生きざまが記されています。

ぜひ、参考にしてください。

さて、深志高校にとって、明日、８月１日は決して忘れることができない日です。今から５８年前の、１９６７年、昭和４２年８月１日　１３時４０分ころ、本校の２年生が学年の行事として集団登山を行っていた西穂高岳独標で落雷に遭い、１１名の生徒の尊い命が奪われ、１３名の方が重軽傷を負うという遭難事故が発生してしまいました。２，３年生は昨年、一昨年の一学期終業式でお話を聞いていると思いますので、きっと記憶に残っていると思いますが、年に一度のことですので、記憶を新たにするという意味で聞いてください。１年生は初めてですから、ぜひ記憶に留めていただきたいと思います。

当時、本校では、毎年夏休みに２年生の希望者を対象に、北アルプス西穂高岳登山を行っていました。西穂高岳というのは、長野県と岐阜県の県境にそびえる標高２９０９ｍの山です。事故の起きた昭和４２年の２年生は、深志２１回生の皆さんです。何回生というのはとんぼ祭の回数と同じです。今年の３年生は７８回生ですので、覚えておいてください。当時の２年生約４５０名のうち、参加を希望した約１００名の生徒を５０人くらいずつ２班に分けて、前期と後期の２回で実施することになっていました。事故にあったのは、その前期の方でした。

行程は２泊３日の予定で、１日目は上高地のベースキャンプに泊まり、２日目は西穂高岳の山頂まで往復してベースキャンプに戻って宿泊、３日目に松本へ帰るという日程でした。事故の当日８月１日は快晴の天気、朝早く、山頂を目指してベースキャンプを出発。後刻事故の場となる独標を通り過ぎ、午後１２時２５分頃、生徒４１名と引率の職員５名が西穂高岳山頂に着きました。

スライドの一番奥の尖ったピークが西穂高岳山頂、手前の台状に見えるピークが独標です。

ところが、ここで、それまでの晴天とは打って変わってガスが立ちこめ始め、ぽつりぽつりと雨が降り出し、雷の音も聞こえてきました。１２時４５分頃、雨具をつけて急いで下りにかかりましたが、雨はだんだんと強まり、降り始めた雹に体を打たれ、先頭が独標に差し掛かるころには、雷鳴が大きくなってきました。

独標は高さが１０メートル～２０メートルくらいの岩山で、両側が絶壁となっている狭い尾根です。

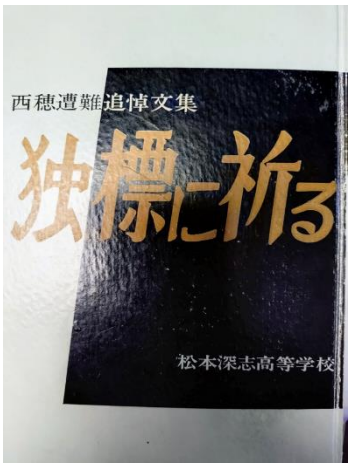
スライドは近くからの映像です。西穂高岳の山頂に行くのにも帰るのにも、尾根伝いにそのピークを登って降りる必要があり、迂回することはできません。岩場がむき出しの尾根には逃げ場もなく、一行が何とか独標を越えて、その先のハイ松地帯へ逃げ込もうとしていた矢先、落雷は深志高校の一行を直撃してしまいました。時刻は、午後１時４０分と推測されています。亡くなった方は１１名、全員がすべて独標北側の尾根、台状に見えるピークの向こう側を上っていた方でした。亡くなった要因としては、落雷による電撃死が９名、電撃により転落したことが要因の方が２名です。以上が、本校の悲しく痛ましい事故の概要です。

毎年、同窓生の有志の方々が、８月１日に慰霊登山を行ってきました。新型感染症の影響等で一時見送られましたが、３年前より再度同窓生の有志の方々、本校の山岳部による慰霊登山が行われており、今年も本日より行われています。

また、校内にはいくつかの遺品とともに当時の記録を留める新聞記事などが保管されています。

落雷で破れた帽子、破裂した登山靴、熱で変形したアルミ製の水筒、様々な写真など。落雷の恐ろしさを感じるとともに、涙がこぼれ落ちてきます。

落雷事故の１年後、本校では、教職員を中心に、４８４ページにわたる「西穂遭難追悼文集　独標に祈る」を刊行しています。



この「独標に祈る」には、事故にあわれた方々の証言、学校行事としての登山を検証する文章、亡くなった１１名の方々の生い立ちや写真、家族や友の追悼の言葉が述べられています。

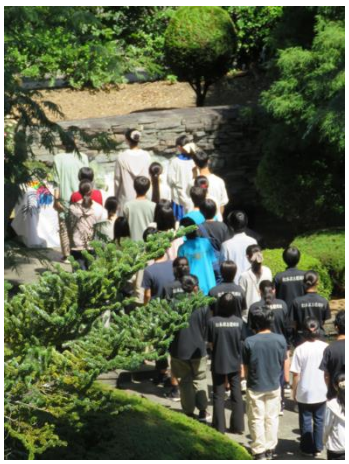
将来への大きな希望を抱き、悩みや葛藤と向き合いながら高校生活を送っていた少年が、１６歳、１７歳で人生を終わらざるを得なかった苦しみと悲しみ、そして元気に帰ってくると信じていたわが子を突然失ったご両親、ご家族の悲しみはいかばかりであったか、想像に難くありません。

追悼文集に記載されている、亡くなった１１人の中のある人の略歴を紹介します。

「昭和４１年４月松本深志高等学校入学。名門深志高校に入学出来、家中の喜びも一入でした。１学期は通学だけに体も疲れ　勉強もむずかしく自分でも苦しかったように思われました。２学期、３学期と１年も終り２年生になり学校にもなれ勉強にも力が入るようになってきた矢先でした。夢や希望を胸一杯に抱いたまま１６年は余りにも短すぎました。」

明日、８月１日、午後１時３０分、講堂南の慰霊碑前で追悼式を行います。

昨年の追悼式

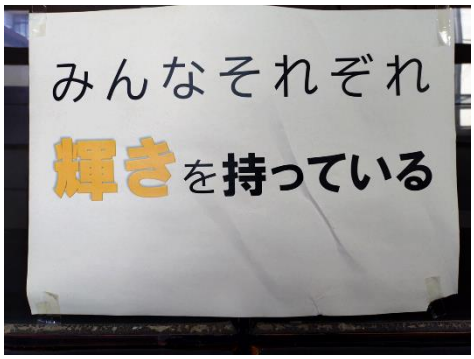


ご遺族や同級生などの関係者もお見えになります。生徒の皆さんも、お時間の都合のつく方は、ぜひ慰霊式まで足を運んでください。また、３年生は模試が行われていると思いますが、黙祷へのご協力をお願いします。

なお、この遭難事故から５０年を経過した２０１７年に信濃毎日新聞が特集を組んだ記事を、先日Google Classroomで配信しました。２１回生の皆さんがどのような思いを抱いて５０年を迎えたか共有していただきたいと願います。

夏休み中には８月１５日の終戦記念日もあります。今年は第二次世界大戦の終結から８０年を迎える年です。改めて平和の尊さや戦争の教訓を振り返り、平和と命、自分の命の尊さについて考えてほしいと思います。

校長室入口隣の窓には「みんなそれぞれ輝きをもっている」と書いた紙が貼ってあります。新しく貼り変えようと思いつつ、そのままにしてあります。深志高校入学後、自分と周囲の人を比較し、自分は劣ってるのではないか、変わっているのではないかなどと考えて落ち込んでしまうときはありませんか。でも、皆さんは一人ひとり輝きを持っています。何か特定の物差しで測って比べることはできないと思います。昨年の今頃の自分はどうだったか、少し前の自分はどうだったか、今の自分は必ず成長しているし、ほんの少し頑張ったことがあると思います。成長したこと、頑張ったことを褒めてあげましょう。



それでもなお、切なさ、苦しさを感じるときは、周囲の誰か、先生、友だちに相談してください。学校以外の相談窓口もあります。

辛いとき、苦しいときはＳＯＳを出して構いません。自分を大切にしてください。

明日から長期の休みに入ります。

熱中症に注意していただき、今しかできないこと、普段できない何かを行い、充実した夏になることを期待しています。私は、少し落ち着いた時間をみつけて、活字に触れる時間をとりたいと考えています。

最後に、２点、報告させてください。

まず、該当する授業やクラブではすでにお話や紹介があったと思いますが、国語科の上原愛恵先生が、７月２６日から産前休暇に入りました。後任は梅村泰代先生です。梅村先生、よろしくお願いいたします。梅村先生からお言葉をいただいていますので紹介します。「２、３年生の皆さん、３月には『最終講義』などと言ってたのに、再び戻ってきてしまいました。どうぞよろしくお願いします。」

次に、すでに報道等を通じてご存じの方も多いと思いますが、７月中旬にオーストラリアで開催された国際数学オリンピックに日本代表として参加した３年４組の狩野慧志さんが、見事満点、金メダルを受賞しました。本当におめでとうございました。狩野さんにお話を伺いたいと思います。狩野さん、お入りください。